

I
問一

美的質とそれを表す美的概念は対象に備わる客観的特質ではなく、ある時代の社会・文化が規定した枠組みに沿った主観的反応に過ぎず、あるものを特定の美的概念で捉える理由は、そのように規定されているからと言うほかないということ。

問二

特定の社会・文化において歴史的に共有された理念や価値基準に基づき、一定の枠組みのもとで構造化され秩序立てられた主観的な経験である「美的質」を備えたものとして価値づけられる以前の、対象がもっていたありのままの特質。

問三

日本人が西洋の美的伝統を学んでそれなりに理解できるようになったように、西洋人には日本人が共有してきた美的な価値観は到底わかるはずがないと断ずることはできないから。

問四

美意識は特定の社会・文化における枠組みに規定され、常に時代や社会に相関するものとして形成されるとみなす美的フレーミングの相対主義の立場からみれば、個々の美的概念がそこから分化する根源的な統一的根拠としての美が存在するとする大西の議論は妥当性を欠くから。

問一 II

予想される最悪の事態というものはかえって起こらないものなのだという迷信をつよく言い聞かせることで、遅くなっても巻子が帰ってこないことを案じる緑子だけでなく自分自身をも安心させようとしたから。

問二

帰宅の遅い母を心配している緑子は、ジnkクスについての説明を聞かされても落ち着けず、夏子が急に動きはじめたことに驚いて警戒の姿勢をとりつつ、不安定な自分を見離さないでほしいとすがりつこうとしているから。

問三

母親の行方不明を殺人という言葉と結びつけそうになり、むしろ緑子の想像が及びもつかないような、それでいて緑子の身にはまだ生じてはいない危険で非現実的な言葉の連想に興ずるよう促すことで、不安になっている緑子をわずかでも安心させられると考えたから。

問四

緑子とともに、生死にも関わるような危うい言葉を探索するうちに、帰宅した巻子の立てた音によってジnkクスが破られ、言葉を通じて仮想するだけの世界にはけつして現れることのない強固なリアリティをもつものの衝撃に打ちのめされたから。

問 Ⅲ

問一 和歌で使われる言葉や文法をごまかしております。歌人が和歌を詠むということは何はさておきあつてはならないこととございます。

問二 もし花が咲くならば、亡きあの人が生きていた昔を偲んで、露が花にかかるように袖に涙が流れる、つまり、自分を偲んで泣いてくれと思つて、あの人はこの花を植えたのだらう。

問三 西行は、自作の和歌の初句について定めかねていたので、定家と慈円にその旨を尋ねたものの、二人から適当な返事をもらえなかつたので残念だと思いつつ、慈円のもとからは立ち去らず立ち聞きしたときに、慈円が「風になびく」と詠み出したので、自分の詠んだ「するがなる」では「富士」だけにかかるが、「風になびく」とすると、「富士の煙の」までかかつてつながりがよいと考えたから。

問 Ⅳ

「ほのぼのとあかしの浦」と和歌を詠み出しても、趣向がかわつて「高砂やこの浦船に帆をあげて」と置きかえて「島隠れ行く船をしぞ思ふ」の下の句に続けても和歌は成立するように、和歌は心動かされたものをそのままに詠み出すのがすばらしいと考えている。

問 Ⅴ

和歌を詠む際には、各句の言葉の選択をよく吟味すること并注意し、和歌の題については熟慮して歌題に關係のないよけいな言葉を詠まないようにすることが秀歌の条件であり、さらに、和歌の仮名遣いや文法をいいかげんにせず、詠み手の感動が相手によく伝わるようにするのが理想的である。

問一 IV

楚の人が身長の低い晏嬰に恥をかかせるために、小さな門を作ってそこから入るように勧めたのに対して、晏嬰は犬が通るくらいの小さな門から入れば、楚の国は犬の国ということになりますよとからかったということ。

問二
まさにこのもんよりいるべからず(と)。

問三
齊の都臨淄には多くの居住区域があり、すべての住民が袂を広げると張り幕のようになり、汗を払えば雨のようになるほど人口が多く、人材は豊富であるということ。

問四
齊は人材が豊富であるというのであれば、齊王はどうしてお前のような者を我が国への使者として赴かせたのか。

問五
齊では各国に使者を送る場合、賢明な君主の国へは賢者を、愚かな君主の国へは愚者を送ることになっており、最も愚かな私晏嬰が楚へと送られましたと言つて、暗に楚王を愚かな君主だと馬鹿にしたということ。